

ディストピア作品における支配体制について  
— 『一九八四年』 『すばらしい新世界』 の比較から —

220084 木村 岳里

序章

ジョージ・オーウェル (George Orwell, 1903-1950) の『一九八四年』 (1949)、オルダス・ハクスリー (Aldous Huxley, 1894-1963) の『すばらしい新世界』 (1932) はともに 20 世紀を代表するディストピア小説である。一般に「ディストピア」とは、トマス・モアが著書『ユートピア』 (1516) で「どこにもないよい場所」の意で使用された「ユートピア」の裏返しとして、「どこにもない悪い場所」の意を持つとされている。心理学者である Trahair は著書の中で「ディストピア」の初出をジョン・スチュアート・ミル (John Stuart Mill, 1806-1873) の発言であるとしたうえで、ギリシャ語で好ましくない、悪いという意味を持つ「dus」という接頭辞を付けたもので後に逆ユートピアの意で使用されるようになったと示している (110)。

ディストピア小説が鳴らす警鐘は色褪せるどころか近年ますます現実味を帯びている。インターネット技術や AI の普及に伴う情報操作やプライバシーの希薄化などオーウェルやハクスリーが描いた管理社会の様相を彷彿とさせる。世界情勢を見ても、侵略戦争や過度な権力の集中など全体主義の影を感じさせられる。こうした状況下でディストピア小説は我々の行く末を案じる一種の預言書として再び多くの読者を惹きつけている。英語教育研究者の年代はディストピア小説の特質を現代文明の反人間性的な傾向を誇張し、その未来に先伸ばした姿を描くことによって、同時代の人に警告を發し、反省を促すものであるとしている (151)。実際に『一九八四年』、『すばらしい新世界』にはそれぞれ異なる形ではあるが反人間性的な特徴が色濃く描かれており、そこからは同時代の人に様々な警告を發していることが読み取れる。

上述した両作品はともに反人間的で絶望的な社会体制を描いたディストピア作品であるが、その支配体制は全く異なっている。そこで本稿では、対照的な二つの作品のディストピア的要素について比較研究をすることで、強固な支配メカニズムがどのようなものか明らかにすることを主題とする。また、本稿の目的は、明らかになった強固な支配の特徴と作品が示唆する現代への忠告をどのように活かしていくべきかを考えることにある。研究方法としては、ジョージ・オーウェルの『一九八四年』とオルダス・ハクスリーの『すばらしい新世界』の内容を分析し、両作品における支配メカニズムの比較を行う。本研究は先行研究を用いた作品内容の分析を第 1 章、第 2 章で行い、そこから考えられる筆者の主張を第 3 章から終章にかけて論じていく。

第 1 章では、『一九八四年』における支配制度について分析する。まず、テレスクリーンやスパイ団の存在など、監視システムを中心とした物理的な統制方法について分析し、どのような支配が行われているかを論じる。次に、思考を操る二重思考や新言語のニュースピー

ク、歴史の改変など内面的な支配に考察を広げ、自由のない世界の本質へと迫る。そして最後に、下層市民プロールの存在や意図された貧困などの社会構造についてまとめ、主人公であるウィンストンがどのように抵抗し、抑圧されるのかを分析していく。これらの分析により、『一九八四年』における支配がどのような点に重点を置いた支配であるのか、そしてその支配の強みを明らかにし、その支配体制の強固さの理由について論じる。

第2章では、『すばらしい新世界』における支配制度について分析する。まず、成長障害処置であるボカノフスキー法や遺伝子の操作など、先天的に支配層に都合の良い人格を作りあげる役割を果たす生物学的統制について論じる。次に、後天的に支配層に都合の良い人格を作りあげる役割を果たす条件づけ教育や睡眠教育、見せかけの幸福で思考を惑わせる万能薬ソーマについて分析する。最後に、階級制度や大量消費主義などの社会構造について考察し、主人公ジョンの抵抗とその結末について論じていく。これらの分析により、『すばらしい新世界』における支配が重要視している点やその支配を強固なものにできている理由を明らかにし、その巧妙さについて分析する。

第3章では、第1章と第2章で分析した両作品を比較し、どちらがより巧妙な支配方法を有しているのかを支配基盤と目的、具体的な制度、自由と尊厳の統制という三つの観点から比較し検討していく。まず、『一九八四年』にみられる支配と、『すばらしい新世界』にみられる支配の異なる支配基盤、それぞれの社会が目指す目的について比較し、支配基盤と目的という側面においてどちらの支配が強固であるか論じる。次に、『一九八四年』における物理的監視や暴力、『すばらしい新世界』における生物学的統制や心理的条件づけなど両作品における具体的な支配制度について比較し、具体的な制度という側面においてどちらの支配が強固であるか分析する。最後に、両作品における抵抗とその失敗について考え、両作品が示す人間の尊厳や自由の異なる意味について論じる。

## 第1章 『一九八四年』 作品分析

本章では『一九八四年』の社会にみられる支配構造を多角的に分析し、この作品における支配体制について考える。本作品で描かれる社会における支配は、システム的な支配である物理的統制、人間内部の支配である心理的統制、そして社会の構造の三つに大別することができる。そこで本章では、それぞれの側面から本作品における支配体制を分析し、どのようにして強固な支配を実現しているのかを論じる。第1節では物理的支配、第2節では心理的支配、第3節では社会構造と物語における抵抗について分析する。

### 第1節 『一九八四年』の物理的統制

本節ではテレスクリーンやスパイ団などの監視システムを中心とした物理的支配について分析していく。『一九八四年』では監視や暴力など物理的手段によって人々の行動を制限することによって支配層である党による支配が確立されている。ここでは各支配システムの内容について先行研究を踏まえて分析し、本作品で物理的統制がどのような役割を果たしているのかを明らかにしていく。

物理的統制の中で最も特徴的なのは徹底された監視システムであろう。舞台となる架空の国オセアニアでは、下層階級であるプロールを除きすべての家庭にテレスクリーンと呼ばれる監視装置が設置され、一切のプライベートが排除されている。このテレスクリーンは生活音や映像を同時に捕捉し、主人公のウィンストンがたてた小さな音でも拾うほどの高性能さを誇るだけでなく、耳障りなニュースや音楽などを発信するテレビのような役割も果たしている。この機械の前では不安げな様子や少しでも異常性を感じさせる表情を浮かべるだけで危険であり、顔に不適切な表情を浮かべることを「表情犯罪」と呼び罪に問われている。発言のみならず、ほんの些細な考え事さえも許されないのである。

医師で研究者の Bhatta など多くの研究者が指摘するようにこのシステムはミッシェル・フーコーのパノプティコン概念とよく似た監獄型社会である(9)。フーコーは「見る＝見られる」という概念を切り離した一望監視装置は、被拘留者に対し常に監視されているという意識を植え付けることで権力を没個人化させ、その意識から自発的に権力による強制を受けさせていると論じている(233-234)。この理論では囚人が常に監視されているのではないかと意識することが重要視されており、実際に監視されているかどうかは問題にならない。監視されているかもしれないという感覚が人々の内面に規律を生み出し、支配層である党への抵抗の糸口すらも掴ませないのである。

英文学者の日中は「警察の物理的なパトロールもあり、さらに、監視の事実を断片的に明示することで監視は常時、普遍的に行われていることを国民に可視化し、意識化させる」(13-14)と論じている。作中では日中の指摘する通り、テレスクリーンによる監視、警察の物理的パトロールが監視の普遍性を人々に植え付けているが、その二つのシステムだけでなく、市民の目もまた監視ツールとして機能し重要な役割を果たしていると考えられる。作中でウィンストンは「スパイの真似事をする素人こそまさしく何よりも危険な存在なの

だ」(96)と述べており、相互監視社会の恐ろしさが描写されている。また、相互監視のシステムは他人同士のみならず家族間にも及ぶ。子どもたちは組織的に親に反抗するように教育され、親をスパイしてその逸脱行為を報告するよう教え込まれている。「家族は事実上、〈思考警察〉の延長となったのだった」(205-206)という描写からみられるように、自分が最も関係が深く、信頼できるはずの身内までも監視システムの一部に組み込まれ、プライベートを蝕んでいく。

監視社会の象徴としてオセアニアにはビッグ・ブラザーという存在がいる。「ビッグ・ブラザーがあなたを見ている」(8)という言葉と顔写真が街のいたるところに存在しており、階段の踊り場などの建物にはもちろん、切手や本の表紙、旗、ポスター、たばこの箱などいたるところに彼の顔が刻印されている。英文学者の大木は、存在すらも怪しいにもかかわらず大衆から崇拝の対象となって絶対的支配者とされるビッグ・ブラザーは、党によってある種の神話となり真実を隠蔽し大衆を欺いたヒトラーと同様であるとし、プロパガンダに絡めてその全体主義的構造の危険性を指摘しており(63)、作中には人々にビッグ・ブラザーを崇拝させ結束を強めさせる様子が多く描かれヒトラー的な側面も多くみられる。しかし、これまでの監視システムの分析を踏まえると党は常に監視されているという意識を人々に植え付けることを目指しているため、ビッグ・ブラザーは独裁者としての側面よりも党の監視の目を可視化したものとしての側面が強いのではないかと考えられる。ウィンストンも壁に貼られたポスターを眺めて「こちらがどう動いてもずっと目が追いかけてくるように描かれた絵」(8)と表現していることからその監視の目としての役割は果たされていたであろう。生活の中にビッグ・ブラザーの目があることで、人々は常に監視されているという意識がより一層強まるのである。

オセアニア社会では監視とセットで機能を果たしているものとして「蒸発」の恐怖が挙げられる。単に監視されているだけであれば恐れも少なく済むが、そこで少しでも党に反抗しているかのようにみえるそぶりを見せると、それが些細な表情の変化であったとしても思考犯として党に捕まり、蒸発させられてしまうのだ。蒸発させられた人は過去の記録すらも全て消されてしまい、元から存在しなかったことにされてしまう。この蒸発という死よりももっと恐ろしいものは人々に根深い恐怖心を植え付け、これが後ろ盾となり人々は絶対に反抗できない状況に陥らされているのである。そして、その後に拷問や死刑など暴力的な扱いが待っていることは想像にたやすく、そういった暴力の恐怖が人々の抵抗の抑止力となっている。

このように、『一九八四年』の物理的支配において一貫しているのは徹底して抑圧するという姿勢である。人々の内面に植え付けられた監視や暴力の恐ろしさは人々が支配に抵抗しようとする隙を与えず、党へ反旗を翻すということを抑止している。そこに余暇などの快楽は微塵もなく、あるのはただ徹底して抑圧され続ける生活のみである。物理的統制は、オセアニアでの支配において外面から人々を党へ絶対服従するよう強制する、直接的な強制機能があるということができる。

## 第2節 『一九八四年』の心理的統制

本節では、前節で分析した人々を監視や暴力などの恐怖で支配する物理的統制に対し、内面にアプローチし行動や思想を統制する心理的統制について分析し、どのように強固な支配を実現しているのかについて論じる。心理的統制の分析は、快樂など抛り所もない社会で人々がどのように党に懐柔され、支配の枠組みに組み込まれているのかを考えるうえで重要な役割を果たす。オセアニア社会にはイングソック（イギリス社会主義）と呼ばれる支配的イデオロギーが存在しており、その根幹を成すのが「二重思考」という特殊な思考方法と、「ニュースピーク」と呼ばれる新言語体系、そして「歴史の改変」である。

初めに二重思考について分析する。オセアニア社会においてはこの思考法が社会の礎となっており、この思考法を理解せずして社会の仕組みを理解することは困難である。二重思考とはオセアニア社会における言葉であるが、現代の言葉にすると「現実コントロール」であり、矛盾する二つの事象を無意識的に同時に受け入れることによって成り立っている。作品内では「忘れなければならないことは何であれ忘れ、そのうえで必要になればそれを記憶に引き戻し、そしてまた直ちにそれを忘れること、とりわけこの忘却・想起・忘却というプロセスをこのプロセス自体に適応すること」（57）とあり、人々は意識的に無意識状態に陥り、自らが行った催眠行為を催眠行為として意識しなくなると説明されている。これにより党は人々の忠誠心を確かなものとし、完全な誠実さの下で権力を無限に維持し続けることが可能となる。また、「理解力が深くなればなるほど迷妄も深まるものだ。つまり知的になればなるほど正気を失っていくのだ」（330）とある通り、このシステムは党に対して欺瞞を抱き得る知識層すらも欺き、支配下に取り込む。

社会学研究者の Ilyas はこの二重思考の最も明確な例として「戦争は平和なり」、「自由は隷従なり」、「無知は力なり」という党の三つのスローガンを挙げている（34）。確かにこれらは現代的な考え方をすれば全て矛盾する二つの概念で構成されており、それがオセアニア市民たちに当たり前に受け入れられている点から、矛盾する二つの事象を無意識的に同時に受け入れるという二重思考に重なる。また、オセアニアを統治している四つの省の名前もまた、意図的に現実と相反するものでありながら受け入れられている二重思考の例としてみることができる。「平和省」は戦争に関わり、「真理省」は歴史改変などの虚偽に、「愛情省」は拷問に、「潤沢省」は飢餓に関わっている。このように二重思考はオセアニア社会においてイングソックの中核を担い、党の権力維持に大きく貢献している。

続いて、二重思考から派生してここからは歴史の改変について分析する。イングソックの中心的教義として、過去は変わりやすいものであるという考えがある。オセアニア社会では党があらゆる記録を完全に掌握しており、党員の精神を二重思考によって完全に管理しているため、過去は党の思い通りに頻繁に改変されている。作中では過去の改変の必要性は二つの理由から説明されている。一つ目の理由は、予防的な策としての機能である。この社会においては党の策略によって計画的な貧困に見舞われており、物質的な豊かさはない。しかし、党員たちに改変された過去を比較の基準として記憶させておくことで自分たちは昔に

比べて豊かな暮らしができていのだと思込ませることができ。二つ目の理由は、党の絶対性を維持するという点である。過去の改変は党が発する推測や予言が常に正しいということを示すために絶えず行われ、党の弱さとみなされ得る方針の変更などは決して行われない。党がすべてにおいて中心であり、あくまで歴史はそれに付属するかのように変更されていくのである。

ウィンストンは歴史の改変を行う真理省に務めているが、その描写に歴史改変の巧妙さを見ることができ。彼は党が行う歴史の改変に不信感を抱いており、党が出した明らかな歴史改変を友人が単純に信じた際には、「パーソンズはいとも簡単に動物並みの愚かさで鵜呑みにした」(92)と描写されている。しかし、「ウィンストンにとって人生の最大の喜びは仕事だった」(69)とあるように、自身が新たな歴史を創り出していることにやりがいを感じてすらいえるような描写もみられる。党は歴史改変の作業を細分化し、全貌を見えないようにすることでこの悪行を単なる作業へと変え、市民たちに嬉々として歴史を歪ませているのである。以上の分析から、歴史の改変の恐ろしさは党の永続的な絶対性を支えている点、人々の思考を麻痺させている点、そしてその改変作業に違和感を感じさせない点にあるといえるだろう。

最後にニュースピークについて分析する。ニュースピークとはオセアニアで開発され、完成間近の新言語体系である。「ニュースピークの目的は挙げて思考の範囲を狭めることにある」(82)とある通り、この言語は市民の思考の幅を狭めることを目的とし、日毎に言葉の破壊が行われ続けている。例えば、「犯罪」や「反逆」などの言葉を語彙から削除することができれば、市民たちはその概念すらも頭によぎらなくなるため、異端的な思想はそもそも生まれなくなる。思考犯罪などはそれを表現する言葉自体がなくなるため不可能になるのである。英文学者の川端はニュースピークの着想源には「ベイシック英語」と呼ばれるものがあると論じている(121)。「ベイシック英語」とはイギリスの心理学者 C・K・オクデンが考案し、1920年代半ばに提唱し始めた補助的国際言語で、英単語を 850 言語に限定し、文法を簡略化することで非英語話者にとって習得しやすくした言語である。作者オーウェルはこの「ベイシック英語」の効用を評価しながらも、英語が第一言語でない人々の思考から明晰さを奪う可能性を秘め、独裁のための道具にもなり得るといふ帝国主義的な側面も認めており、『一九八四年』の中で独裁者の権力維持に利用され得る危険性を示唆した形としてニュースピークを登場させたとも考えられる。

言語学者の Courtine は、言語は人間の生きた記憶であるため、権力が人間を完全に支配するには言語を制御しなければならないと説明している(70)。彼の論に従えば、言語は全体主義支配と人間の間を線引きをし、監視から人間を覆い隠すシェルターの役割を果たすというのである。逆説的に考えると、『一九八四年』においてはこのシェルターがニュースピークにより形骸化し、全体主義的支配の監視の目に晒されているということになる。思考の範囲を狭めることを目的とするニュースピークが現に党への抵抗という思想を排除し、支配から逃れられなくしているという点から考えれば Courtine の指摘は正しく、言語の支

配が人々の支配の安定性に寄与しているといえる。つまり、ニュースピークも人々の思考能力を低下させ、生きた記憶である言語を破壊し歴史改変を確固たるものに行っているという点で支配を強固なものに行っているのである。

このように『一九八四年』における心理的統制は「二重思考」、「歴史の改変」、「ニュースピーク」に支えられており、これらは一貫して党の絶対性を強化し人々の思考能力を削ぎ、党へ反抗させないことへ繋がっている。つまり、心理的統制は党の思想に合うように人々を内面からコントロールする認知制御機能を果たしており、前節で論じた物理的統制と合わさることで、人々を内面からも外面からも徹底的に抑圧する機能を果たしているといえる。

### 第3節 『一九八四年』の社会構造と抵抗

前節までは『一九八四年』における具体的な支配システムを物理的側面と心理的側面に分けて分析してきた。本節ではそのシステムを支える社会構造とウィンストンの抵抗について論じる。階級制度や貧困などの社会構造は前節までみてきた具体的な支配システムをより強固なものにするうえで重要な役割を果たすため分析する必要がある。また、ウィンストンの抵抗を追うことで本作品に描かれる支配構造の強固さを確認する。

オセアニアにおける階級は大きく三つに分けられ、階級外の党の象徴的な存在としてビッグ・ブラザーが君臨する。ビッグ・ブラザーの下には党中枢と呼ばれる上層が総人口の2%以下に制限され存在している。さらに、その下には党外郭と呼ばれる一般党员の中間層が存在しており、党中枢が国家の頭脳、党外郭は両手と表現される。党外郭の下には下層であるプロールと呼ばれる声なき大衆がおり、全人口のおよそ85%を占める。表向きはこれらは世襲制ではないとされているが、3層間の入れ替わりはとても少なく、特にプロールたちは実質的には党に入る資格を得ることは認められていないようなものである。

「希望があるとすれば、それはプロールたちのなかにある」（108）という言葉は作中を通してたびたび登場し、プロールの重要性が強調されている。作中の描写では党の内部崩壊はまず考えられず、「ブラザー同盟」という反体制組織も存在はしているが大人数では集合することはできない。それゆえに、全人口の大多数を占めるプロールが唯一党を打倒する力を生み出す可能性を秘めているというのがこの文言が示すことである。プロールは生まれながらに劣った存在で人間ではないとされ、とても貧しいながらも比較的自由な環境で暮らしている。彼らはその劣性ゆえ、執拗に監視し続けることも、行動を制限することも、党のイデオロギーを叩き込むことも必要ないのである。そして、彼らには全体を見通すだけの能力がないため、生活の中で不満を抱いたとしてもそれを党の責任に帰着させることはできない。つまり、プロールたちは党打倒の可能性を秘めているものの、党により無知と貧困の抑圧を受けており、政治意識を持つことさえできず反逆の口火を切ることはできないのである。川端は、『一九八四年』の巻末附録、「ニュースピークの諸原理」においてニュースピークの説明が過去時制でなされていることを指摘し、プロールたちの子孫が「意識を

持った種族」として生まれ、党を打倒する主体となったのではないかと推察している(172)。作中で繰り返されるプロールへの希望と巻末附録において党の支配体制が打倒されていると読み取れる過去時制での表現を踏まえるとこの考察は一定の説得力はあるが、テキスト内ではプロールが打倒できそうな要素は一切なく、あまりに楽観的な推測であると言わざるを得ない。プロールという希望が存在しながらも党の打倒へ繋げることができないもどかしさがこの社会の絶望的なまでに強力な支配を強調している。

階級制度とは別に貧困問題も『一九八四年』における社会構造として重要な役割を果たしている。これは単なる貧困ではなく、人々をコントロールするためのシステムとして機能している。「雪が降れば屋根は必ず水漏れを起こし、暖房システムは、完全に停止されるとき以外でも、節約を理由に半分しか稼働しないという有様。修理を行うには、自分でできる場合は別として、こちらの事情など一顧だにしない委員会の許可が必要だった」(35)、「暮らしの物質面に思いをめぐらせると腹を立てずにはいられない」(92)とあるようにオセアニアにおける生活はとても貧しく常に物不足に陥っている。しかし、これは意図的なものであるという指摘が、反体制派の象徴的存在である作中に登場するエマニュエル・ゴールドスタインの本で示されている。オセアニアでは「戦争は平和なり」という党のスローガンの通り絶えずどこかの国と戦争状態にあり、この本ではそれは「大衆に過度な快適を与え、それによって、ゆくゆくは彼らに過度な知性を与えてしまいかねない物質を、粉々に破壊する」(295) ための一手段であると書かれている。つまり戦争は、全般的な生活水準を上げずに労働によって生産された製品を破壊し続け、行き場を失った過剰な労働力を費やす手段であるとされているのである。

さらに、この社会では民衆の生活必需品の半分は慢性的な不足に陥るように意図的に仕向けられている。これは政策上都合の良いことであり、窮乏が一般化していることで階級間での優越感を生み、階級制度の維持に寄与する。「戦争は平和なり」とは戦争をしていることで党の支配体制を維持することができるという意味で、「真の恒久平和とは、永遠の戦争状態」(307)なのである。また、この慢性的な貧困を怒りに変えさせ、国民の怒りを政府の敵に集中させる行事である「二分間憎悪」や「憎悪週間」などで党の支配体制を維持するベクトルで発散させることで、国民の内面を操ることに寄与している。

ここからはウィンストンの抵抗と抑圧について考えていく。ウィンストンの抵抗と抑圧に映し出されているのはウィンストンの考える自由とそれを力によって抑圧する強引な党のやり方である。反体制的な思想を抱いていると党に気付かれたウィンストンは耐え難い拷問を繰り返し受けるが、党が強いる二重思考を受け入れることができず、「自由とは二足す二が四であると言える自由である」(125)という彼なりの自由を保持し続ける。ここまではいかなる暴力や精神攻撃も人間の感情や精神性までは作り変えることができないというウィンストンの主張を肯定するように描かれている。

しかし、ウィンストンはかねてよりトラウマを抱えていたネズミを使って拷問された途端、それまで一切拒絶していた二重思考をすんなりと受け入れてしまうのである。これは恐

怖がいかなるものにも勝り、人間の感情や精神性までも全く作り変えてしまうという党の主張の実証になっている。「過去の改革家たちが夢想した愚かしい快樂主義的なユートピアの対極に位置するもの」（414）という言葉にみられるように、いかなる快樂も排除した恐怖と苦痛により徹底的に抑圧する世界が『一九八四年』における支配の本質なのである。

また、党がこのような抑圧的な支配を続ける理由として、権力は手段ではなくそれ自体が目的であり、この社会では権力を維持し続けることが目指されていることが挙げられる（407）。ここでいう権力とは人間を支配する力であるとされており、「われわれの文明の基礎は憎悪にある。われわれの世界には恐怖、怒り、勝利感、自己卑下以外の感情は存在しなくなる。他のものはすべてわれわれが破壊する一何もかも破壊するのだ」（414）にみられるように党は憎しみによって人々を支配しており、権力の連鎖によって統制を強固なものとしている。オセアニア社会には三つの階級があり、また互いにスパイをし合うなど、支配する権力というものが重要な役割を果たしている。

英文学研究者の神尾は「ひとりの中に支配欲と被支配欲が同居しているという二面性があるのだ。そして支配者と被支配者は共依存的に結びついている。そうした本性を秘めた個々が社会を構成しているため、人間の根源的な欲望と社会体制はある意味で共棲の関係にあるのだと気付かされる」（31）と論じ、ウィンストンや党中枢のオブライエンなど登場人物に支配する欲求と支配される欲求が見られることを指摘している。実際に作中では、ウィンストンはオブライエンや党の支配に苦しめられながらもプロールのことは終始見下し、同じく反体制派で性的関係にあった女性であるジュリアのことも自分の手の中に収めたいという支配する側としての欲望も見え隠れしている。この相互支配体制の確立の成功は安定した支配を継続できていることを意味する。

このように『一九八四年』においては恐怖と苦痛により徹底的に抑圧する支配が根幹にあり、それを階級制度や意図された貧困状態、相互支配関係などの社会構造が支えていることが読み取れた。徹底した監視システムなどの物理的な統制や思考統制などの心理的な統制はもちろん、恐怖と苦痛による徹底した支配とその支配を恒久的に維持するための構造が絶望的なまでに党の支配を強固なものとしており、そこに抗う余地は全くない。

本章では、『一九八四年』における支配体制について、物理的統制、心理的統制、社会構造と抵抗という三つに分けて分析した。初めに『一九八四年』における物理的統制について分析した。徹底された監視社会は人々に反乱の余地を与えない点を確認し、党による強引な支配制度により恐怖の力を借りて抑止していることも論じた。物理的統制において一貫してみられたのは徹底して抑圧する姿勢であり、人々はあらゆる物理的システムにより日常的に抑圧されていることが明らかになった。次に、人間の内面を支配する心理的統制について分析した。この分析から、心理的支配システムはいずれも党の絶対性を強め、人々の思考を麻痺させることに重点を置いていることが読み取れた。思考が麻痺した人々は確固たる自分の考えを持つことができず、党の思想をそのまま受け入れ、完全な支配に取り込まれてしまうことからこれらのシステムも強固な支配を支えていたといえるだろう。最後にオセ

アニア社会に存在する社会構造について分析し、ウィンストンの抵抗の失敗から党が重要視する考えについて検討した。相互支配関係をもたらす階級制度や人々から抗う手段を奪う意図された貧困状態は支配の永続に寄与しており、また、抵抗しようとする者も圧倒的な暴力と恐怖によって抑圧する党の権力の絶対さを再確認した。

## 第2章 『すばらしい新世界』 作品分析

前章ではジョージ・オーウェルの『一九八四年』における支配体制について物理的側面、心理的側面に分けて分析した後、社会構造の分析とウィンストンの抵抗について論じ、支配体制の強固さを確認した。本章では『一九八四年』の比較対象となる『すばらしい新世界』における支配体制について生物学的統制、心理的統制に分けて分析した後、社会構造と本作品における抵抗について論じる。第1節では人間が実験室で人工的に生産されていることを中心とした生物学的統制について、第2節では幼少期の条件付け教育や睡眠教育など心理的統制について、第3節ではこの社会における階級制度や大量消費主義などの価値観、野蛮人ジョンの抵抗と抑圧について分析していく。

### 第1節 『すばらしい新世界』の生物学的統制

本節では人間の生産や成長阻害措置など生物学的な統制について分析する。本作品の特徴として、科学的な方法を用いて、苦痛や抑圧を味わわせることなく人々を支配している点が挙げられる。生物学的な統制はその土台のような役割を果たしており、この世界での支配の基礎となるため、いかにして機能しているかを検討する必要がある。

新世界を支配する世界政府の掲げる三つのスローガンとして、「共同性」「同一性」「安定性」というものがある(7)。これらのスローガンを実現する上で非常に重要な役割を果たしているのは「人間の生産」である。この世界において人間は母親から生まれるのではなく機械から生み出され、母親という言葉自体が卑語として嘲笑の対象となり、家族という概念は浸透してすらいな。単に人間が生産されているだけではなく、その生産が当然のこととして受け入れられ、かつて当たり前であった自然出産に取って代わってしまっているのである。

まず初めに、社会の安定性を維持する主な手段である「ボカノフスキー法」について論じる。新世界では受精卵の時点で将来の社会階級が定められており、体外の容器内で受精させられた受精卵のうち、下位の階級(ガンマ、デルタ、エプシロン)に育つものは「ボカノフスキー法」の処置を受けることになる。通常は一つの受精卵から一人の人間に育つが、この方法を用いて受精卵にストレスを与えることで、一つの受精卵が分裂し8~96人の人間に成長する。これは一卵性の多胎児のみで小規模な工場を一つ稼働させられるほどの人数であり、完全に連携の取れた製造部隊の生産が可能になる。「大量生産の原理がとうとう生物学に完全に応用されるのだ」(13)とある通り、工場と同じ規格の人間が大量に生産される社会が実現されている。毎朝、何人の胎児を墮出しする必要があるかという情報が更新され、昼過ぎには迅速に調整される。「予想外の損耗分は迅速に補填される」(17)という言葉に見られるように人間はまるで足りなくなったパーツのように補充され、震災など有事の際にも大量生産の技術により迅速に対応される。このシステムでは到底人間らしい扱いがされているとはいえないだろう。

続いて、墮に移された受精卵が「社会階級決定室」へと移された後の措置について検討す

る。この部屋では様々な成長阻害措置や、将来の役割に合わせた最適化措置が施される。最も特徴的な措置は、階級によって酸素の量を調整し、発達を阻害しあえて能力の低い人間を作り出す措置である。下の階級になればなるほど酸素の量を減らし、脳や身長に影響を与えていく。孵化・条件づけセンターの所長が「エプシロン階級の胎児には、エプシロンの遺伝形質のみならず、エプシロンの環境も与えなければならんことがわからんのかねっ」(22)と語るように遺伝形質だけでなく、育成環境もそれぞれの階級に合わせたものを与え、階級の区分を生物学的に明確化している。その他にも、下の階級に育つ胎児は将来働く場所までも決められているため、その労働環境に合わせた条件付けや対応が施される。例えば、熱帯地方で働く予定の個体には熱い部分と冷たい部分が交互にあるトンネルをくぐらせる。冷たい部分には強いX線という不快要素が組み込まれており、胎児は将来、寒さを嫌い、熱い環境で最も効率よく活動できるようになる。

新世界ではこれらの人間の生産や、胎児期の措置によって反乱のない、完璧な支配体制の基礎を創り上げている。その原理は本文中の「幸福な人生を送る秘訣なのだよ—自分がやらなければならないことを好むということが。条件づけの目的はそこにある。逃れられない社会的運命を好きになるように仕向けるということにね」(25)という言葉にみることができ、この言葉は人生の大半を占める労働を好んで行うように条件づけることが重要であり、そうすることで精神的に安定した生活を送ることができるということを示している。人々が反抗心を抱く根底には、自分の現状に対する不満や他者との比較から生じる劣等感などがあると考えられる。しかし、この新世界ではどのような階級であれ、どのような労働環境であれ、その環境に幸せを感じるように仕組まれているため一切の反逆性を排除した社会システムが構築されているのである。

上述したような受精卵を分裂させ一卵性の多胎児を生み出す方法は一般に「受精卵クローニング」と呼ばれるが、親の遺伝子を完全にコピーし量産する方法は一般的に「体細胞クローニング」と呼ばれている。英文学者の萩原は、新世界の次段階は「体細胞クローニング」であると暗に示し、その危険性を指摘している。彼は「体細胞クローニング」がもたらす問題を二つ説明しており、それは一切の「他者性の廃絶」と「全体性の終焉」である。前者は、父や母など他者の存在を必要とせず無限の自己増殖を繰り返し、一切の他者性を排除するというものである。後者は、「体細胞クローニング」によって身体が細胞や臓器など分割可能な部品の集合体として捉えることが可能となり、全体という概念それ自体を崩壊させてしまうというものである。どちらの考えも一言でいえば「身体性の崩壊」という言葉に集約され、大量生産による個性の喪失という事態を招くことになる。萩原は指摘している(27)。新世界においてさらなる安定性を追求するとなれば、労働内容や労働環境により特化した遺伝子を持つ人間を作り上げ、その遺伝子を持つ人間を「体細胞クローニング」により無限に補充し続けるという方法が導き出されるであろう。とすると萩原の指摘する通りやはり新世界の行き着く先は「体細胞クローニング」を利用した完璧に安定した社会となるだろう。人間の大量生産により個々人の存在価値が希薄になっているこの世界では身体部

品の交換などは必要ないため、「全体制の終焉」はあまり問題にならないかもしれないが、「他者性の廃絶」の危険性はこの世界においても同様であり重要である。

本節冒頭で示した家族という概念の喪失は「他者性の廃絶」から成るもので、人間の生産により父や母の存在は必要なくなっている。世界統制官という世界政府高官の一人であるムスタファ・モンドは、社会の安定のためには個人の安定が必要であるとしたうえで、家族という感情を激しく動かす存在があつては個人の安定は成し得ないと発言している(61)。つまり、新世界ではこの「他者性の廃絶」が意図的に行われており、社会の安定のために激情を生むような人間関係を廃絶するように統制されているのである。これにより人々は安定した情緒を持つことを強いられ、個性の喪失を強制されている。新世界に生まれる人々は生まれた時から将来が定められており、遺伝的に、先天的に知性レベルや体質が世界政府の思うままに決められている点に、この社会の支配の強固さをみることができよう。さらに、人々はそれを幸せであると感じるようにあらかじめ操作されているのである。

ここまで論じてきたように、ボカノフスキー法、受精卵クローニングなどの技術を用いた人間の生産は他者性を失わせ、仕組まれた幸せを享受させられ自由がないという点で緻密に考えられ強固な支配を確立した世界である。何よりも、その息苦しさに当人たちが気づくことが出来ないという点で出口の見えない絶望が強調されており、支配体制としては優れたものとなっているのである。

## 第2節 『すばらしい新世界』の心理的統制

前節では人間の大量生産や胎児期の措置など『すばらしい新世界』における支配の土台となる生物学的な支配について分析したが、本節ではさらにその土台を強固なものとし、その安定性をさらに確実なものとする心理的統制について検討する。心理的統制は主に幼児期に行われる条件づけ教育、睡眠教育、そして大人になってから頻繁に使用される万能な薬である「ソーマ」によって行われる。条件づけ教育は無意識下の意思決定を、睡眠教育は意識下の意思決定を世界政府の都合の良いものにし、ソーマは万が一安定性を脅かす不安要素が生まれかけた際にそこをカバーするために存在する。この三つは、世界政府に都合の良い思想や習慣を植え付け人々の内面を支配し、この世界での支配を持続的なものとするためにとても重要であるため、支配のメカニズムを理解する上で分析する必要がある。

初めに、人々の無意識下の行動を決定づける条件づけ教育について分析する。条件づけの恐ろしさはその絶対性と内容が世界政府の思い通りであるという点である。条件づけは幼少期に施され、人々は社会の安定性を維持するために都合の良い行動を思考を介さず反射的に行うように成長する。作中で描写されているのは、生後8か月、下から2番目の階級であるデルタ階級の子どもの例である。この例では子どもたちにサイレン音や電気ショックなどの恐怖と花や本など新世界の住民が嫌悪すべきものを結びつけることで無意識下でそれらを避けるようにコントロールしている。

ここで条件づけられるものは安定した社会を築くために緻密に計算されており、下層階

級にとって時間の無駄となる読書、経済効果を生まない花などが嫌悪対象として設定されている。条件づけ対象は社会状況に応じてアップデートされるため、まさに徹底的に管理されているといえるだろう。かつては自然を愛するよう条件づけ、自然を求めて交通機関を使わせ経済効果を獲得していたが、自然観賞それ自体は無償で工場に需要をもたらさなかった。そこで現在は田園地帯で行うスポーツを好むよう条件づけ、交通機関を使用させかつ器具の利用から工場需要ももたらすようにしている。このように、条件づけを通して人々は世界政府に都合の良い思考を持たされ、それを本能的に保持している。世界政府側の思考を持つ人間を後天的に作り出すことを可能にしているという点で条件づけは新世界における支配を強固なものにしているといえる。

続いて、人々の無意識下の行動を決定づける条件づけに対して、意識下の行動を決定づける睡眠教育について論じる。睡眠教育は人々の内面を支配する上で条件づけ教育を補完するような立場として解釈することができるものであり、その名の通り睡眠中に知識を植え付けるといえるものである。知識を植え付けるといっても睡眠中に学習したことは言葉として覚えることはできるが、応用などはできないため、言葉に従えばよいだけの簡単な道徳教育のみで活用されている。実際に行われている科目としては性的価値観を教え込む講座や階級間の格差を明確にし、自分の階級に誇りを持つように仕向ける講座などがある。これらの睡眠教育は道徳性や社会性の知識を植え付け、子どもたちの意識の深いところに根を張り、大人になってからも行動原理であり続ける。

睡眠教育は先ほど論じた条件づけ教育とセットで用いられることで、世界政府の意向に忠実な思考体系を形成する。条件づけにより無意識下で、さらに睡眠教育により意識下でも安定性を維持する上で都合の良い行いに至るようになるのである。「言葉を使わない条件づけは大ざっぱで画一的だ。細かいニュアンスをつけられないし、複雑な行動規範を植え付けることができない。それには言葉が必要だが、理屈抜きの言葉でなければならない」(42)と作中で孵化・条件づけセンターの所長が述べているように、幼児期の条件づけにより何を好み、何を嫌うかという大まかな思想の土台を作り、睡眠学習により道徳的、社会的な行動規範、価値観を教え込むことで明確な思想体系を築き上げているのである。また、この発言には言葉の重要性も見て取ることができる。『すばらしい新世界』においては世界政府に都合の良い行動規範を植え付けるために、より明確にその思想を伝達できる言葉が重要視されているのである。

最後に人々の内面を安定させる万能薬であるソーマについて分析する。ソーマは完璧な薬と称されており、多幸作用、麻酔作用、幻覚作用を特徴とする薬である。「半グラムで半日休暇をとったような効果、一グラムで週末を愉しんだような効果、二グラムで豪華東洋の旅を満喫したような効果、三グラムで永遠の闇に浮かぶ月世界に遊んできたような効果」(85)とあるようにその効果は絶大で、気分が落ちこんだ時や嫌なことがあった時に簡単に休暇を取ることができる。この絶対的な効果により世界政府は反乱分子に繋がり得る精神的に不安定な人間を救い出し、社会の安定を実現することができている。

表向きは完璧であるが、そこには当然危険性も存在している。「キリスト教とアルコールの利点だけをとって、弊害は捨てた薬だ」(82)と作中では説明されているが、それは誤りである。英語学研究者の Khanom は安定や幸福の幻想と引き換えに感情の深み、社会的誠実さ、道徳的規律を犠牲にすることの危険性を高めているとソーマにみられるリスクを指摘しており(112)、これらの危険性は作品を通して実際に暗示されている。しかし、それらの危険性は世界政府にとっては都合よく人々を操る手段の一つとなる点が重要である。新世界では安定性が重視されているため、支配体制を強固なものにする上で重要となるソーマの副作用は感情の深みの欠如である。この社会で人々は嫌なことが頭に浮かぶとすぐに気持ちを紛らわすためにソーマを摂取するため、負の感情への耐性がない。レーニナという女性登場人物が未開人が住んでいる野蛮人居留地へ赴いた際にも、ソーマを切らして不快な現実に向き合うことに絶望している様子が描写されている。反抗心は不安定な精神状態や負の感情と向き合うことで生まれるものという側面が強いため、ソーマで自分の感情を丸め込む人々には反体制的な思想も反抗的な態度も生じる余地がない。ソーマは人々の思考や感情を麻痺させ偽りの幸福と従順さを与える国家公認の麻薬なのである。

人文学者の奥村はこれらの支配システムを分析したうえで「条件反射や睡眠時学習によって感情そのものを統制されたものにとって、かれの一人称で考えるかぎり、かれはなんら苦痛を感じない。(中略)やはり、この感情に先手を打つような『すばらしい新世界』式の行動調整を全面的に悪だと言い切るのは、ことのほか容易ではないようである」(120)と世界政府の支配手法の巧妙さを評価したうえで悪だとは言い切れないと指摘している。しかし、ここまでみてきたように、全てが世界政府の都合通り動くようコントロールされている社会は悪であるといわざるを得ない。そこに人々の自由意思はなく、決められたルールの上を決められた反応をしながら進むのは人間の尊厳が欠落しているといえるだろう。

このように幼いころに施される条件づけ教育、睡眠教育は世界政府が自分たちに都合の良い考えを持ち、行動する人々を後天的に生み出すことを可能にしている点で安定した支配を根幹から支えているということが出来るだろう。そこには各人の意思決定はなく、意識下においての決定も無意識下においての決定もどちらも世界政府の意図した形をとるようになっていく。ここでは意思決定権がないことや生まれる前から人生が決まっていることから人間の尊厳や自由といったものはないがしるにされているが、表向きは暴力的な抑圧などなく自由があるかのような錯覚を起こさせている。また、決められたルールから逸脱しかけた人や、安定性を失い社会の歯車を乱しそうになった人はソーマにより幸福漬けにすることで思考を鈍らせ上手く懐柔していく。奥村も指摘するように人々が幸福であると感じており、悪と言い切れない点に『すばらしい新世界』における支配の恐ろしさをみる事ができるのである。

### 第3節 『すばらしい新世界』の社会構造と抵抗

前節までは『すばらしい新世界』における支配構造を胎児期の生物学的統制という土台の

部分と、幼児期の教育というその土台を支える部分に分けて分析してきたが、本節では支配するための環境的な面で重要となる階級制度や大量消費主義といった社会構造について、そして、この世界における支配がどれほど強固なものであるかをみるために野蛮人居留地出身のジョンの抵抗と失敗について論じる。階級制度は『一九八四年』の社会においても存在していたが本作品でも重要であり、大量消費主義は安定した支配を継続する上で重要な役割を果たしている。また、『一九八四年』でウィンストンの抵抗が描かれているのと同じく本作品ではジョンの社会への抵抗が描かれており、それに対する社会の抑制の働きも支配の強度を測るうえで分析が必要である。

本作品においては、未来社会の秩序を支える根幹として階級制度が描かれている。階級はアルファ、ベータ、ガンマ、デルタ、エプシロンの五層に分かれており、人間は母胎ではなく孵化・条件づけセンターにおいて人工的に生産される段階で、すでにどの階級に属するかが決定される。例えばアルファやベータは知的・管理的役割を担う一方、ガンマ以下は単純労働や肉体労働に従事するように設計される。そして前節までで説明してきた条件づけや睡眠学習により、外的強制ではなく内面から階級制度を受け入れる仕組みが徹底されている。「アルファの子は灰色の服。わたしたちよりうんと勉強をする。私は自分がベータでほんとうによかった。なぜならそんなにたくさん勉強しなくていいから。そしてガンマやデルタよりずっといい。(中略)デルタの子たちとは遊びたくない。エプシロンなんてもっとひどい」(41)という睡眠教育の内容にみられるように人々は自分の階級を肯定し、他の階級との比較によって満足感や優越感を得るように仕向けられている。

この階級制度がもたらす効果は二つあり、一つ目は社会の安定である。この社会では明確な階級分けがなされており、人々は自分の階級が最適であると幼児期の教育で思い込まされており、そこには他階級への嫉妬や階級間の争いは存在しない。また、過酷な労働環境で仕事に従事する人も前節で述べたボカノフスキー法によりその土地、環境に適した人間として生まれるためその点からも争いが生まれにくい仕組みになっている。すべての人間が自分の役割を好み、不満を抱かずに機能することで反乱や抵抗の余地はほとんど残されない。二つ目は効率化の実現である。上の階級の人々は知的労働に集中し、下の階級は簡単な反復的作業に従事することで、社会の各分野は最適化される。こうした仕組みは暴力的な支配を必要とせず、むしろ人々は自分の地位に誇りを持ち続け統治の持続性を高める。階級制度は不満や抵抗の芽を摘むことで社会を安定させる装置なのである。

英文学者の内田が「国家や共同体が安定・安全を最優先にした場合には、集団の不寛容さが強く現れるということをハクスリーは強調している」(211)と論じているように安定を維持するためにこの社会では厳格な管理体制が敷かれており、遺伝子操作や睡眠教育を用いて入れ替わりのない明確な階級分けが行われている。

『すばらしい新世界』における社会構造として、大量消費主義という思想も安定した社会を築く上で大きな役割を果たしている。作中では大量生産方式の礎となった T 型フォードが登場した日を新たな紀元と定めていたり、経済効果を最大化するために人々に郊外でス

ポーツをするよう条件づけていたり、古い服、破れた服はさっさと捨てて新しいものを買うように教育していたりと消費主義を重要視している社会性がみられる。

これに対し英文学者の Brad は、20 世紀前半のアメリカで発展した考えであるフォーディズムに対する批判が『すばらしい新世界』で作者が風刺したかった部分であると指摘しており、その宗教的側面に目を向けている (103)。優生学ではなくフォーディズム批判が主な主張であるという部分はそれを裏付ける十分な要素があるとは言えないため議論の余地があるが、フォーディズムが一種の宗教的な役割を果たしているという指摘は正しいと考えられる。ムスタファ・モンドは作中で、宗教で埋め合わせなければならないものも何もなく安定しているために宗教を信仰する必要はないと語っているが (336)、作中ではフォード記念日なるものがあり、言語における「God」が「フォード」に置き換えられているなど信仰されている様子が描写されている。これは Brad の、フォーディズムを疑似的な宗教として人々の宗教的衝動を抑えているという主張 (97) の正しさを証明しており、強固な支配を確立するうえでのフォーディズムの重要性を宗教的側面からも示しているといえるだろう。

この大量消費主義は『一九八四年』でも共通の特徴であり、本稿で扱う二作品どちらにおいても重要な役割を果たしている。その役割とは時間と労力を奪い反乱の余地を与えないところにあると考えられる。先述した宗教的衝動の発散ももちろん重要であるが、大量消費主義自体は人々の時間と労力を削ぐことが主な役割になるといえるだろう。また、『すばらしい新世界』において大量消費主義は、消費物を作る労働で時間と労力を使わせるという目的に加え、余暇の時間で映画の進化版のような触感映画やソーマなどに時間を使わせている例から見て取れるように、時間を使わせるという役割も果たしていると言える。以上のことから、大量消費主義には時間と労力を使わせ反乱を防ぐ役割があるといえるだろう。

続いてジョンの抵抗について論じる。本作品においてジョンは、徹底的に管理された新世界に対する異物として描かれる存在である。彼は生まれも育ちも野蛮人居留地であり、世界政府の価値観に染まらずに成長したため、文明社会の人々が当然視している快樂主義や非個人的な幸福に強い嫌悪を抱く。ジョンとムスタファ・モンドの会話にもみられるようにジョンは新世界の自由のない人間らしからぬ暮らしに嫌悪感を抱いており、自由や美德、不幸になる権利を訴えている。

ジョンの抵抗の原点は彼が人間の尊厳や自由を求めている点にある。作品内でジョンは、不愉快や不自由を受け入れる自由、苦しむ権利といった無条件の幸福を受け入れない自由を追い求めていた。母親リンダとともに野蛮人居留地で育った彼はシェイクスピアの作品に深く影響を受け、「愛」「罪」「救済」といった言葉とその価値を学んだ。しかし、世界政府の人々はそのような感情を嫌い、ソーマという完璧な薬や条件づけ教育によってそれらを排除している。母親リンダへのソーマの使用を批判したり (221)、触感映画を下劣なものと評価したり (243) と、ジョンはこの社会へ少しずつ違和感を覚え、やがてその価値体系そのものに対して反抗を試みる。

彼が人間の尊厳や自由を求めて反抗しているという筆者の主張はソーマの配布を止める場面とムスタファ・モンドとの会話から読み取ることができる。野蛮人居留地で育ち、シェイクスピアを読んで育った彼にとって、精神の繋がりなしに性行為をすることやソーマで安易に快楽を求めることは墮落と同義であった。そこで彼は社会全体への抗議として病院でのソーマ配布を阻止しようとした。「その恐ろしい毒を全部捨てろ」(305)とソーマを捨てさせ、人々に人間らしい苦しみを取り戻させようとするも、快楽による安定を是とするこの社会では人々に全く理解されない。結果として、彼の呼びかけは病院で働く従業員たちに抑えられ、警官隊によって鎮圧されてしまう。この場面において、彼の抵抗は社会の「安定」の前に無力であることが表され、個人の信念が集団心理と国家による支配に押しつぶされる構図が示されている。

物語の後半でジョンは世界統制官のムスタファ・モンドと対話する。モンドは幸福とは偉大なものではなく安定している状態であると語り、「安定性を得るためには代償を払わなければならない」(318)とし、この社会では安定性のために芸術や科学、宗教を犠牲にしなければならないと語っている。それに対しジョンは「僕は不幸になる権利を要求しているんです」(346)と訴えている。この言葉からは、快楽と安定の裏で奪われてしまった芸術や科学、宗教など人間が自分で思考する活動に価値を見出しているジョンの思想が読み取れる。自分で考え、行動し、各々の人生を全うすることこそ人間の自由と尊厳を尊重する社会であり、そこに不幸が含まれていようともそれらを要求する姿勢は、『すばらしい新世界』における世界政府の支配体制への抵抗の表現であるといえるだろう。しかしこれらの言葉は簡単に受け流されてしまい、ジョンの主張は誰にも尊重されることはない。このように、世界政府は反体制的な思想からなる反抗さえも安全に管理された逸脱として処理してしまうのである。

やがてジョンは社会から完全に隔離された田舎で孤独な生活を始めるが、結果として自殺してしまう。この自殺に関して英文学者の三浦は、群衆による精神的追い詰めと、性欲に屈した自身への絶望と恥辱の二点を挙げている(2-5)。前者の解釈は、自ら身を隠したジョンとそれを追いかけ精神的に追い詰めた新世界の住民という作中の表現からも読み取れるように自殺要因の少なくない部分を占めているように思われる。後者の解釈についても、シェイクスピアの価値観から婚前の性交を拒み続けていたにもかかわらず、性欲に敗れる出来事が起こってしまい、ジョンが後悔を示す作中の描写(371)から妥当であるといえるだろう。

しかし、最も注目すべき点は性欲に敗れたという事実よりも、自身の思想に反した行動をとってしまったことである。ジョンはモンドとの会話の中で、「害虫は根絶やしてしまった。あなたがたらしいやり方だ。不愉快なものは、それに耐えることを覚えるかわりに、なくしてしまう」(343)と社会や人々にとってマイナスになるものはすべて排除するという新世界の在り方を批判し、不都合や不愉快に耐えることの重要性を訴えている。この思想に反し、ジョンは群衆の殺到や孤独、自身の性欲に耐えることができずに自死し、ある意味では死を

もって忍耐から逃げ出してしまったのである。一見すると彼の抵抗は敗北に終わっているように思えるが、彼は自分の望んだ自由や不幸になる権利を行使し、自分の意志で命を絶ったのであり、彼が思う人間の尊厳や自由を全うすることができたといえる。

世界政府の支配は暴力や恐怖ではなく、快樂と充足によって内面から人間を支配する点に特徴がある。その支配の背景には階級制度や大量消費主義といった社会構造も大きな支えとなっており、安定した支配体制の維持に繋がっている。また、ジョンの抵抗にもみられるように、新世界は不幸や不都合、不愉快なものをすべて取り除いた幸福を基盤とした社会であり、人々はそれを当たり前として捉え、それらを楽しむ自由や人間らしさに全く理解を示そうともしない点にこの社会の支配の根強さをみることができる。

本章では、『すばらしい新世界』における支配体制について生物学的統制、心理的統制、社会構造と抵抗という三つに分けて分析した。まず初めに、この世界では人々が世界政府の都合に合わせて遺伝子操作され、パーツ補充のように人間を補充している点から、人間の尊厳が軽視されていることが分かった。また、人間の生産が引き起こす他者性の廃絶により、激情を生むような人間関係が根絶され、社会を安定化していることを明らかにした。続いて、幼少期の条件づけや睡眠教育など心理的統制について分析した。心理的統制では条件づけにより無意識下の行動を統制し、睡眠教育により意識下の行動も統制するという働きがなされており、後天的に従順な人間の生産を可能にしている点で安定した支配を根幹から支えているということができた。それに加え、ソーマが不安定な人々を苦痛や不安から逃避させる働きをしており、快樂による支配の形を強固なものにしていた。最後に、新世界における社会構造、野蛮人ジョンの抵抗について分析した。階級制度は社会の安定化と効率化に貢献しており、大量消費主義は時間と労力を削ぐ役目を果たし統治の持続性を高めていることを明らかにした。また、ジョンの抵抗の失敗から、『すばらしい新世界』では幸福ではありつつも苦しむ自由や人間の尊厳を排除していることが分かった。

### 第3章 支配体制の比較

前章までは『一九八四年』と『すばらしい新世界』における支配体制について分析してきたが、本章ではこの二つのディストピア文学に描かれる支配体制を比較し、どちらの体制がより完成された支配を実現しているのかを検討する。両作品に共通するのは、いずれも人間の自由意思を奪い、体制の安定を絶対化している点である。しかし、その手段には大きな違いがある。第1節では支配基盤と目的を、第2節では制度的側面を、第3節では作品内にみられる人間の尊厳と自由について、これまでの作品分析の内容を踏まえながら比較していく。これらの比較から、どちらの作品に描かれる支配体制がより効果的に人々を意のままにし、強固で持続的な支配を可能にしているのかについて論じていく。

#### 第1節 支配基盤と目的

第1章、第2章の分析から、『一九八四年』と『すばらしい新世界』の両作品はいずれも、人間を完全に統制する社会を描いているが、その方法や目的は全く異なるものであることが理解できた。前者は「恐怖と苦痛」を基盤とする暴力的な抑圧支配であり、後者は「快楽と充足」を基盤とする穏やかな管理支配である。いずれの体制も、個人の自由と主体性を徹底的に奪い、人間を支配するという点については一致している。しかし、支配を正当化するイデオロギーや、それを持続させるための社会構造は対照的である。本節ではその基盤と目的について両作品を比較し、支配基盤と目的という観点においてはどちらの社会が優れているのか検討していく。

英語教育研究者の Keisman は『一九八四年』においては「支配」が最優先され、支配を実現、維持するために服従させ依存させることに重きを置いているとし、『すばらしい新世界』では世界政府が「幸福」を最優先し、人々の幸福に寄与するように設計されていると論じている (29-30)。他の多くの学者も同じように両作品における支配は目的や手法が大きく異なると指摘しており (Gerhard 30, Fatubun 4)、前章までの作品分析からも『一九八四年』に描かれる暴力的な支配と『すばらしい新世界』に描かれる幸福な支配の異なる特徴を読み取ることができた。しかし、両作品において目指されているのは「安定した支配体制の維持」という点で共通している。また、『すばらしい新世界』では単に幸福が重要視されているわけではなく、幸福によって思考を麻痺させることが社会の安定維持に繋がるために重要視されている。

『一九八四年』における支配の基盤は、党による恐怖と暴力による独裁である。党中枢の一人であるオブライエンがウィンストンに語る「党が権力を求めるのはひたすら権力のために他ならない。・・・権力は手段ではない、目的なのだ」(407-408)という言葉にみられる通り、オセアニア社会では権力は手段ではなくそれ自体が目的であり、党は市民の幸福や秩序のためではなく、権力そのものを保持するために権力を行使している。そして彼の「真の権力、獲得せんとわれわれが日夜闘わねばならない権力とは、物を支配する権力ではなく、人を支配する権力なのだ」(413)という言葉は、党が追求し続けている権力が人を

支配することに繋がる表現であり、党の最終目的が「権力による人の支配の維持」であることを明確に示している。恐怖政治を支えるのは監視と暴力であり、第1章第1節でまとめたテレスクリーンによる常時監視、スパイ団や思考警察による密告制度、そして蒸発の恐怖や暴力がその体制を維持している。こうした支配の基盤は、苦痛を通じた従属にある。危険思想を持つと判断された人間が蒸発させられる日常などから人々は党の残酷さを知っているがゆえに、逆らうことを放棄し、最終的には「 $2+2=5$ 」といった虚偽をも受け入れるに至る。つまりオセアニアの支配は、外的暴力による恐怖と内的服従を一体化させた支配である。この体制は市民に絶えず支配を意識させ、恐怖によって抵抗の意思を砕く点で直接的であるが、ウィンストンやジュリアなどが反体制的な思想を持っていたように、党に反対する思考が生まれる可能性自体は完全には排除できておらず、反抗の意思を示し行動した場合にその意思を潰すという仕組みからこの社会は常に反抗の可能性を前提としているといえる。

一方、『すばらしい新世界』の支配は、恐怖ではなく快樂と充足による支配を基盤としている。そこでは支配側である世界政府のもと、科学的管理と心理的条件づけによって、人々は無意識下で支配体制に組み込まれることを望むように設計されている。世界統制官の一人であるムスタファ・モンドは作中で「われわれは安定性と幸福を重んじている」(320)と語り、真理や自由よりも社会秩序の維持を重視する。したがってこの社会の支配目的は、オセアニアのように権力そのものを目的とするのではなく、不幸や不安定を排除し、表面的な幸福を永続させ安定を追求することにある。しかし、その幸福は人間の深い感情や思考を犠牲にして成立しており、快樂が支配の道具として機能している。

このように、両作品の支配体制は恐怖か快樂かという対照的な原理に基づいているが、どちらも人間の内面を制御するという点で共通している。『一九八四年』の支配は恐怖によって真実をねじ曲げ、『すばらしい新世界』の支配は快樂によって思考を麻痺させる。すなわち前者は暴力によって人間を屈服させる支配、後者は快樂によって人間を飼い慣らす支配であり、いずれも人間の自律的判断を奪う点で同質である。

両者の支配目的を比較するとオーウェルが描く支配は「権力の永続」を目指し、ハクスリーが描く支配は「幸福の永続」を目指すという違いが見られた。だが、いずれも最終的には人間の精神を拘束し、社会の「安定」を最優先するという同じ目的に帰結する。『一九八四年』の党が人間の精神を完全に支配する未来を描くのに対し、『すばらしい新世界』では人間が自ら進んで支配される未来が描かれる。前者が恐怖による強制的全体主義であるのに対し、後者は人々が快樂によって飼いならされ、自ら進んで支配の枠組みに組み込まれていくという特性から、快樂による自発的全体主義ということができよう。英文学者の南谷は、この対比について『一九八四年』を剛の全体主義、『すばらしい新世界』を柔の管理社会と表現し、この両作品を合わせ鏡のように用いることで、管理・監視社会と個人の自由の問題がより深く透視できると指摘しており(137)、この指摘は両作品の支配の特質を捉える上で極めて妥当である。なぜなら、恐怖による剛の支配と対比させることで、快樂による柔の支配が持つ、目に見えない抑圧という性質がより鮮明になるからである。

Keisman が論じるように、両体制は支配に重点を置く社会と幸福に重点を置く社会と考えることができた。彼女はさらに、『すばらしい新世界』の体制が、市民に支配を意識させない「幸福な無知」を作り出すことで、より効果的に忠実な服従を保証していると指摘している(29-30)。本節での分析からも、この Keisman の主張は妥当であるといえる。なぜなら、『一九八四年』の強制的全体主義が抵抗の可能性を前提に恐怖で抑圧するのに対し、『すばらしい新世界』の自発的全体主義は、遺伝子操作や快樂によって抵抗の意思そのものを発生させないからである。支配基盤と目的の巧妙さという観点から見た場合においては、『すばらしい新世界』の支配体制がより完成されているといえるだろう。

## 第2節 支配の制度的側面

前節では両作品の支配の目的と基盤について分析し、『一九八四年』での支配は恐怖で抑圧する強制的全体主義支配、『すばらしい新世界』での支配は快樂によって麻痺させる自発的全体主義支配であることを明らかにした。支配の理論的原理がそれぞれ恐怖や快樂に基づくとしても、それを現実に機能させるためには、具体的な制度が不可欠である。そこで本節では、『一九八四年』と『すばらしい新世界』における支配の制度的側面を比較し、実際に行われている具体的な制度という観点から見た場合においてどちらの支配体制がより強固なものかを分析する。

『一九八四年』の支配技術は、既存の人間を事後的に統制することに特化している。その象徴が、「テレスクリーン」であり、この技術は、常に見られているかもしれないという恐怖を内面化させ、自己検閲を強いる。また、「ニュースピーク」の開発は、言語という人間精神の基盤に直接介入する試みである。これらの技術は、『すばらしい新世界』のように快樂を与えるのではなく、絶え間ない緊張と恐怖を強いることで人間を支配する。一見すると、事前に不満を消し去る『すばらしい新世界』の技術の方が巧妙に見えるかもしれない。しかし、支配の影響範囲を考えたとき、『一九八四年』の制度的アプローチこそが、より人間の根源にまで及んでいることがわかる。

一方、『すばらしい新世界』の支配は、何よりもまず生物学と化学技術に基づいている。成長阻害措置の「ボカノフスキー法」や遺伝子操作による社会階層の固定化、睡眠教育による階級意識や消費社会の価値観の刷り込み、万能薬「ソーマ」による不安や葛藤の排除は、人間が体制への抵抗意識を抱く前に、その可能性の芽を摘み取る点で極めて効率的である。支配は苦痛ではなく、あらかじめ設計された幸福感と満足感によって達成される。これは、人間を内側から作り変えるというよりは、特定の行動や感情を示すように条件づける技術であるといえる。

両作品の決定的な差異は、社会を統制する制度の設計思想にある。『一九八四年』の制度は、社会の安定以上に「権力のための権力」という純粋な目的のために、より包括的かつ侵略的に人間の内面を支配する。その徹底性は、以下の三つの制度によって支えられている。第一に、歴史の永続的な改竄である。『すばらしい新世界』では過去は単に忘れられるべき

ものだが、『一九八四年』の真理省では、過去は党の都合に合わせて絶えず積極的に書き換えられ、人々の思考を麻痺させるとともに党の絶対性を維持する手段の一つとして利用される。第二の制度は、二重思考という精神的規律の強要である。これは、『すばらしい新世界』の条件づけが特定の価値観を植え付けるのとは異なり、人間の論理的思考能力そのものを破壊し、党の意志を自己の意志と完全に同一化させることを目指す。そして第三の制度は、家族制度の逆用である。『すばらしい新世界』が不安定要因として家族を解体したのに対し、『一九八四年』は家族を思考警察の延長として支配システムに組み込む。最も親密であるべき人間関係を相互監視の最前線に変えるこの制度は、人間の信頼関係を根底から破壊し、個人を完全に孤立させる点でより高度で徹底的な支配といえるだろう。

これに対し、『すばらしい新世界』の制度、すなわち厳格な階級制度や家族の解体、消費の推奨といったものは、すべて社会の「安定性」という最終目標のために合理的に構築されている。歴史や芸術が軽んじられるのは、それが人々の精神を不安定にさせるからであり、制度の目的はあくまで社会機能の円滑な維持にある。そこでは、人々は真実に関心を持つことなく、幸福な無知の中で生きることが推奨される。

『すばらしい新世界』が描く支配は、科学技術によって人間の欲望を管理し、幸福感を与えることで抵抗の意志を事前に奪うという点で、極めて巧妙かつ持続可能性が高いかもしれない。しかし、支配の徹底性と包括性、すなわち人間の内面世界をどこまで蝕み、作り変えることができるかという観点から評価するならば、『一九八四年』の支配こそが、より高度で、持続的な支配であるといえる。なぜなら『すばらしい新世界』の支配が人々に真実を忘れさせることを目指すのに対し、『一九八四年』の支配は人々に嘘を真実として信じ込ませることを可能にしているからである。『すばらしい新世界』における支配は抵抗に至らせないことを目的としているため、外部からの情報流入に弱く、その後の統制力に欠ける。歴史、論理、言語、家族という人間精神の土台そのものを制度的に作り変え、党が定義する現実以外の一切を存在させない『一九八四年』のシステムは人間から単に自由を奪うだけでなく、人間であることの根幹そのものを奪い去る。以上のことから、制度的側面から見た支配体制では『一九八四年』に描かれる制度がより完成された支配を確立しているといえる。

### 第3節 人間の尊厳と自由

前節までは、両作品における支配の目的や制度的側面を比較し、その巧妙さや徹底性について考察した。本節では、これらの支配体制がもたらす最も根源的な問い、すなわち人間の尊厳と自由がどのように定義され、そしていかにして奪われているのかを比較検討する。支配基盤や目的、支配制度を分析するだけでは、その支配が人間性にとっていかなる意味を持つのかを捉えきれない。両作品が描くのは、単なる政治体制の対立ではなく、人間であることの意味そのものが失われる二つの異なる未来である。ここでは、それぞれの社会で「自由」が何を意味し、「尊厳」がどのように扱われるかを通して、どちらの支配体制がより深く人間性を蝕み強固な支配を確立しているかを論じる。

まず、『一九八四年』における人間の尊厳は個人の内面世界の独立性に集約される。ウィンストンが求める「自由」は、物理的な行動の「自由」以上に、自らの思考と記憶、そして感情を党の干渉から守り抜く「自由」である。彼が日記に記した「自由とは二足す二が四であると言える自由である」（125）という言葉は、客観的な真実を認識し、それを内心で肯定する権利を象徴している。そういった権利すらも、愛情省の拷問、特にウィンストンのネズミの例のような個人の最も深い恐怖を利用した精神的破壊によって奪われているため、党は人々の内面世界へ干渉しているといえる。ウィンストンがジュリアを裏切った瞬間、彼の内面世界は完全に崩壊する。党は彼に偽りを告白させるだけではなく、彼が心から党に従い、ビッグ・ブラザーを崇拝するまで精神を改造した。ここでの尊厳の喪失は、暴力によって個人の意志が奪われたことによって成し遂げられている。本作品において尊厳は、奪われる対象として明確に存在し、その破壊が支配の最終目的となっているのである。また、内面世界の破壊により、「自由」も完全に排除されている。

一方、『すばらしい新世界』における人間の尊厳は、そもそも存在する余地すら与えられない。この社会に存在している「自由」とは、苦痛、不安、葛藤からの「自由」、そして、あらゆる欲望が即座に満たされる「自由」である。そしてこれらの自由は世界政府から押し付けられたものであり、ジョンが求めた「不幸になる自由」は人々に理解すらされない。彼らは何かが奪われたのではなく、初めから人間的な深みを持つ可能性を摘み取られているのである。この世界では、『一九八四年』でウィンストンが求めていた個人の内面世界という概念自体が希薄である。ソーマは不快な感情を化学的に消し去り、人々は自己と向き合うことから逃避し続ける。したがって、ここでの尊厳の不在は、暴力による破壊の結果ではなく、快樂による無関心と忘却の産物である。この支配の強固さを体現するのが、野蛮人ジョンが叩きつける「僕は不幸になる権利を要求しているんです」（346）という叫びである。彼が求めるのは、老い、病み、悩み、愛し、苦しむ権利であり、それらを通じて得られる人間としての尊厳である。しかし、ジョンのこの主張はモンドにも新世界の住民からも理解されず、結果的に自死する描写から、不幸を享受する自由や尊厳が新世界にとって価値のないものであることが示されている。『一九八四年』では尊厳は闘うべき価値であったが、『すばらしい新世界』ではそれは忘れ去られた遺物なのである。

両作品が描く自由と尊厳の喪失を比較すると、その性質に決定的な違いが見えてくる。『一九八四年』の支配は、人間が尊厳や自由を希求する存在であることを前提とし、その意志を正面から叩き潰す。ウィンストンの抵抗は敗北に終わるが、反抗の意思を持ち、抗う行動を取ったという点にはわずかな「自由」が見て取れる。これに対し、『すばらしい新世界』の支配は、人間から尊厳や自由を求める意志そのものを事前に抜き去ってしまう。人々は自らが奴隷であることに気づかず、むしろその状態を幸福だと信じ込み抵抗の意志すら生まれなため、支配はより安定し、永続的になる。暴力による支配には常に反発のリスクが伴うが、快樂によって飼い慣らされた人々は、自ら進んでその支配を受け入れる。

人間の尊厳と自由に対する脅威という観点から見れば、『すばらしい新世界』が描く支配

体制が、より根源的で救いのない強固で持続的な支配を提示しているといえるだろう。『一九八四年』の世界では、人間は人間性を意識しながらそれを破壊されるという苦痛を味わう。しかし、『すばらしい新世界』の世界では、人間は人間性とは何かを知る機会すら与えられず、家畜のように幸福な無知の中で生かされる。意識下で人間性が破壊される世界と、無意識下で人間性について考えることもなく押し付けの幸福に囚われる世界、どちらがより強固で持続的な支配かと問われれば、後者こそが人間性の完全な消滅を意味し、抵抗の意志も生まれなため優れているといえる。自由を奪われることよりも、自由を求める心そのものを失うことの方が、より高度な支配なのである。

第3章ではこれまでの章の分析内容を踏まえ、『一九八四年』、『すばらしい新世界』の両作品の比較を行った。初めに第1節では、支配基盤と目的という観点から比較を行い、『一九八四年』においては恐怖を基盤として権力の永続を目指しており、『すばらしい新世界』においては快楽を基盤とし、幸福の永続を目指しているという違いが見て取れた。この観点からは『すばらしい新世界』の仕組みが自発的全体主義という抵抗の可能性を抑えた徹底支配を実現できているという点から優れていると指摘した。続いて、支配の制度的側面について比較し、それぞれの作品で支配体制を支える具体的な仕組みについて分析した。その結果、具体的な制度面のみから判断した場合、人間であることの根幹そのものを奪い去り、外部からの情報流入にも強いという理由から『一九八四年』の支配体制がより優れていると指摘した。そして最後に、人間の尊厳と自由という観点から比較分析を行い、『一九八四年』においては希求されている人間の尊厳や自由を正面から叩き潰し、『すばらしい新世界』においては人間から尊厳や自由を求める意志そのものを事前に抜き去ってしまっていることがわかった。そして、この観点からは人間性を意識することもなく押し付けの幸福に囚われさせている『すばらしい新世界』の支配がより絶望感をもたらしていると論じた。

## 終章

『一九八四年』、『すばらしい新世界』が鳴らす警鐘は色褪せることなく現代社会においても年々現実味を帯びてきている。文化や社会の在り方、科学技術が大きく変化している今でも読まれ続けているのには理由があり、それは作品内で示された絶望的な社会体制の影を現代社会でも見ることができるのみならず、その社会像に少しずつ近づいている側面があるためである。ディストピア作品の特徴である反人間性的な傾向を誇張し、その未来を描き警告を発するという側面から、ディストピア作品の分析はこれからの我々の未来を考えるうえでも重要であり、そこから学ぶべきことは多分にあると考えられる。

そこで本稿では対照的な二作品におけるディストピア的要素について比較し、強固な支配メカニズムを明らかにすることを主題とした。また、本稿の目的は二作品の分析から過去の名作が現代の我々にどのような警鐘を鳴らし、それをどのように活かしていくべきかを考えることである。研究方法はまずジョージ・オーウェルの『一九八四年』について物理的統制、心理的統制、社会構造と抵抗という三つに分け、その支配方法について詳細に分析した。その後、オルダス・ハクスリーの『すばらしい新世界』における支配を生物学的統制、心理的統制、社会構造と抵抗と同じく三つに分け分析した。そして、両作品の支配体制の原理や方法、自由について比較し共通点や相違点について考察した。

第1章では、『一九八四年』の作品分析から、オセアニア社会ではどのようにして強固な支配を実現しているのかを論じた。物理的統制面では常に完全に監視され、少しでも反抗すれば暴力で抑圧されるという支配体制は人々の行動面を統制し、恐怖で完全にコントロールする。心理的統制面では二重思考やニュースピーク、歴史の改変を通して党の絶対性を強め、また、オセアニア市民の思考力を低下させ反抗に至らせないような仕組みを作り上げていることが明らかになった。社会構造としてはオセアニア社会においては階級制度や貧困が重要な役割を果たしていた。ウィンストンはプロールと呼ばれる最下層に党打倒の希望を見出していたが、プロールも党によってうまく管理されており、消費主義や計画的に行われている戦争からなる貧困が人々の生活を逼迫し、反逆できない状況を作り出していることが分かった。党の支配の恐ろしさはウィンストンの抵抗とその鎮圧に見ることができ、恐怖が人間の精神性すらも作り変えてしまう様はこの社会の恐ろしさを映し出している。以上のことから『一九八四年』にみられる支配が恐怖と苦痛により徹底的に抑圧する支配であることが明らかになった。

第2章では、『すばらしい新世界』の作品分析から、新世界ではどのようにして強固な支配が実現されているのかについて論じた。生物学的統制面では人間の生産が安定した社会の基礎を築き上げていることを明らかにした。人間の生産は遺伝子操作により労働格差から生じる争いなどを生まないため安定性に繋がり、精神を乱す激情の原因となる人間関係が廃絶されているためこの点からも安定しているといえる。知性レベルや個性、人生までもが全て世界政府によって決められているため、そこには一切の自由もないことが読み取れた。心理的統制面からは条件づけ教育、睡眠教育、ソーマが、人間生産によって築かれた支

配の土台をより強固なものにしていることが明らかになった。条件づけ教育では無意識下の行動を、睡眠教育では意識下の行動を統制しており、これは世界政府の思想を本能的に保持する人間を後天的に作り出すことを可能にしていることから支配を強固なものにしているといえる。たとえ精神的に乱れた者がいたとしてもソーマによって幸福に酔わせ、思考を鈍らせることで不安定性を排除していた。また、階級制度や大量消費主義は統治の持続性を高めていることがわかった。ジョンの抵抗の失敗からはこの社会が自由や人間の尊厳を排除していることが明らかになり、その支配の恐ろしさが読み取れた。以上のことから、『すばらしい新世界』にみられる支配が快樂と充足により巧妙に騙し通す支配であることが明らかになった。

第3章ではまず、両作品の支配の目的と理論について考えた。『一九八四年』では支配を実現維持させることに重きを置いている一方で、『すばらしい新世界』では幸福を最優先し、幸福で惑わせて支配していることが分かった。『一九八四年』の体制は恐怖による強制的全体主義、『すばらしい新世界』の体制は快樂による自発的全体主義であると考えられた。どちらも異なる原理に基づいているが、人間の内面を制御するという点で共通しており、この観点からは抵抗の意思そのものを発生させない『すばらしい新世界』における支配がより完成されているといえる。続いて、両作品を支配の制度面から比較した。『一九八四年』における支配は思考能力を破壊し、徹底した監視により人間を内側からも外側からも孤立させていた一方で、『すばらしい新世界』も抵抗の意思を事前に奪うという点で優れているといえるが、人間の内部まで完全に掌握できているとはいえず、外部からの情報流入に弱い点が指摘できる。そのためこの観点からは『一九八四年』における支配が優れているといえる。最後に、両作品で描かれる人間の尊厳と自由について論じた。『一九八四年』では人間の尊厳や自由を叩き潰す支配であり、『すばらしい新世界』ではそれらが求められる以前に抜き去ってしまう支配であった。この観点から自由や尊厳を意識させる以前に抜き去る『すばらしい新世界』の支配がより絶望感をもたらしていた。

以上のことから、両作品は支配の手段こそ「苦痛による強制」と「快樂による誘導」という対極的な位置にあるが、個人の内面を侵食し、人間としての主体性や尊厳を抹殺するという最終的な帰結においては合致しているといえる。両作品の支配メカニズムの根底には、方法は違えど思考の統制などの内面の掌握と、主体性や尊厳を封じることがあり、これが強固な支配を確立していると結論付けられる。現代社会においては、『一九八四年』的な監視技術の高度化と、『すばらしい新世界』的なテクノロジーによる安易な快樂の享受が同時に進行しており、我々は両作品が提示する二つの異なる全体主義の脅威の狭間に立たされていることが示唆された。

『一九八四年』が描いたような、国家や巨大企業によるテクノロジーを用いた監視社会化は、我々の私生活の隅々にまで浸透しつつある。SNS やインターネットの閲覧履歴、街頭の監視カメラ網は、かつてのテレスクリーンを想起させるほどに個人の情報を収集し、アルゴリズムは我々の思想や行動を予測、誘導さえ可能にしている。また、フェイクニュースや

意図的な情報操作は「歴史の改変」や「ニュースピーク」のように真実の価値を相対化させ、社会の分断を煽っている。一方で、『すばらしい新世界』が予見した快樂による支配もまた現実のものとなりつつある。人々はスマートフォンを通じて絶え間ないエンターテインメントや即時的な満足を求め、複雑な現実から目をそらし、自ら思考することを放棄し始めている。遺伝子操作や生殖医療の技術的進歩も、人間そのものを「設計」の対象とする『すばらしい新世界』の倫理観に近づいている側面がある。

現代への最大の警鐘は、この二つのディストピアが個別に存在するのではなく、融合して進行している点にある。すなわち、我々は『すばらしい新世界』的な快樂や利便性を自ら受け入れると同時に、『一九八四年』的な監視・管理システムも自然と受け入れているのである。二作品にはそれぞれ異なる支配の脅威が描かれたが、その複合的な支配の脅威が今現実になろうとしているということを理解し、そういった未来に至らぬよう思考を巡らせることが我々のすべきことであるといえるだろう。

本論文では、『一九八四年』と『すばらしい新世界』の比較分析を通して、両作品に描かれるディストピア的要素の分析から強固な支配体制のメカニズムについて考察し、そこで示される現代への警告について論じた。本稿は数多く存在する二作品の比較研究と異なり、支配体制の優劣を観点別につけることによって単一的な視点では捉えきれない支配の多層構造を明らかにした点に意義があるといえる。

## 参考文献一覧

- Bhatta, Arjun Dev. "Control and Resistance: A Study of Dystopia on Orwell's Nineteen Eighty-Four." *Rupantaran: A Multidisciplinary Journal*, vol.9, no.1, 2025, pp.1-14.
- Brad, Congdon. "Community, Identity, Stability The Scientific Society and the Future of Religion in Aldous Huxley's Brave New World" *ESC: English Studies in Canada*, vol.37, no.3, 2011, pp.83-105.
- Courtine, Jean-Jacques. "A Brave New Language: Orwell's Invention of Newspeak in 1984." *SubStance*, vol.15, no.2, 1986, pp.69-74.
- Fatubun, Reimundus Raymond. "Demolishing Humanity through Pleasure and Pain: Reading Huxley's Brave New World and Orwell's 1984 Side by Side." *Journal of Language and Literature*, vol.23, no.1, 2023, pp.140-148.
- Gerhard, Julia. "Control and Resistance in the Dystopian Novel: A Comparative Analysis." PhD Thesis, California State University Chico, 2012.
- Ilyas, Muhammad Shadab. "Doublethink and Manipulation: Psychological Tyranny in Orwell's 1984." *Academic Journal of Social Sciences*, vol.8, 2024, pp.1-20.
- Keisman, Molly. "Power and Control in Brave New World and 1984." *Prologue: A First Year Writing Journal*, vol.8, Article 4, 2016.
- Khanom, R. "From Huxley's Soma to Smartphones: Exploration of Digital Dependency through the Lens of Brave New World." *Literary Studies*, vol.38, no.1, 2025, pp.110-115.
- Trahair, Richard C. S. *UTOPIAS AND UTOPIANS: An Historical Dictionary*. 1st ed, Routledge, 1999.
- 内田均「オルダス・ハクスリー『すばらしい新世界』における危機と寛容—ディストピアと孤独の現実感」『救いと寛容の文学—ゲーテからフォークナーまで—』, 春風社, 2019.
- オーウェル, ジョージ『一九八四年』高橋和久訳, 早川書房, 2009.
- 大木ゆみ「創られた独裁者: プロパガンダの脅威 (1)」*Otsuma Review*, 大妻女子大学英文学会, 2017, pp.55-65.
- 奥村大介「生命の(反)ユートピア—オルダス・ハクスリー『すばらしい新世界』を読む—」『東京大学大学院教育学研究科基礎教育学研究室紀要』, 41号, 2015, pp.115-124.
- 神尾春香「『1984年』にみられる支配する／される欲望」『英語英米文学論輯: 京都女子大学大学院文学研究科研究紀要』, 17巻, 2018, pp.19-32.
- 川端康雄『オーウェル『一九八四年』: ディストピアを生き抜くために』慶應義塾大学出版会, 2022.

- 年代正孝「Huxley のディストピア」『秋田高専研究紀要』8 巻, 1973, pp.150-156.
- 萩原真一「アウラの消滅：オルダス・ハクスリー『すばらしい新世界』」『慶應義塾大学日吉紀要』, 37 号, 2001, pp.13-36.
- ハクスリー, オルダス『すばらしい新世界』黒原敏行訳, 光文社, 2013.
- 日中鎮朗「監視というオブセッション：未来小説にみる監視と現代」『成城大學經濟研究』234 号, 2021, pp.11-35.
- フーコー, ミッシェル『監獄の誕生 監視と処罰』田村俣訳, 新潮社, 2020.
- 三浦良邦「ユートピア対ディストピア：ジョンの自殺の意味するもの」『近畿大学教養・外国語教育センター紀要』2 巻, 第 2 号, 2012, pp.1-12.
- 南谷覺正「G. オーウェル『1984 年』について—「監視社会」と「自由」の視点から—」『群馬大学社会情報学部研究論集』20 巻, 2013, pp.119-138.